

NPO法人「ホスピタル・プレイ協会」すべての子ども遊びと支援を考える会(葵区)は病気の子に治療への理解を深めてもらう活動に取り組む。11月に名古屋市内で開かれたコンテスートの提案事業でプロジェクトリーダーを務めた。43歳。

—提案事業の内容は。

「子どもの注射針は10歳ぐらいで長くなる。体の発達により長い針が必要になることを視覚的に理解させるため、遊び感覚で腕の内臓構造を理解できる模型の医療への導入を提案した。子どもの採血への恐怖心緩和が期待できる」

企業&NPO協働アイデアコンテスト
最優秀賞の静岡市のNPO法人事務長

みなみのぶよ **南伸子** さん (名古屋市)



この人

—何が評価されたのか。

「事業の先駆性。治療方法が変わる時期の子どもには、頑張らせるための『仕掛け』が必要だが、日本ではほとんど認識されていない。医療現場の隠れた課題に着目した」

—子どもの治療で大切なことは。

「病気は『治せばいい』というものではない。子どもの気持ちを考えない医療は、生きる上でのトラウマ(心的外傷)にもなり得る。大人が一方的に進めるのではなく、子どもに治療の意味を理解させながら治していくことが大事」

—今後のビジョンは。

「提案事業を具現化させるため、模型の製品化への検討を進める。こうした取り組みの必要性を、医療関係者をはじめ一般の人にも訴えていきたい」

◇ 休みの日は愛犬のチワワと遊んで過ごす。